
出会いを力に...ヒューマンエナジー

~ 10000 人のヒューマンアート ~

大東市立四条小学校 中野 泰宏

・ 単元計画

1 . 設定の理由

本校では、平和学習の一環として、6年生になると広島に修学旅行に行ってきた。ここ数年は、被爆された方の聞き取り、平和公園での碑巡り、大久野島の毒ガス工場の見学などに取り組んできた。

新しい出会いを楽しみながら、もっと主体的に平和への思いを深めていけるよう、全体の活動の見直しを図った。被爆された方から聞いた「広島はどこを切っても平和への願いにつながる」という言葉から、いろんな角度から平和に迫ってほしいという気持ちで修学旅行をとらえ直し、いろんな人の平和への思いに触れる取り組みをする。

2 . めあて

広島での取材活動をする（社会）

自分たちの考えたプランをきちんと伝える（国語）

聞き取りや調べたことをもとに発表する（国語）

調べたテーマが一番伝わる方法を考え、発表をする（国語・図工）

平和を大切にすることを育てる（道徳）

修学旅行で出会った人たちや多くの人たちの平和への思いを聞き取る（道徳）

様々な班活動を通して、友だちと協力して最後まで物事をやり遂げる（道徳）

3 . 指導計画

平和登校の時に地域の方の体験談を聞く。

事前学習として、1日目にしたいことを考え、そのことについて調べ学習をする。

班行動をしながら、取材をし、平和とのつながりを考える。

聞き取ったことをもとに、効果的な発表方法を考える。

自分たちの思いを伝えるのと同時に、多くの人々の平和への思いを取材する。

平和へのメッセージカードを書いてもらい、ヒューマンアートを作成して思いを伝える。

平和を願う歌の作詞に取り組み、全校集会などの場で発表する。

4 . 留意点

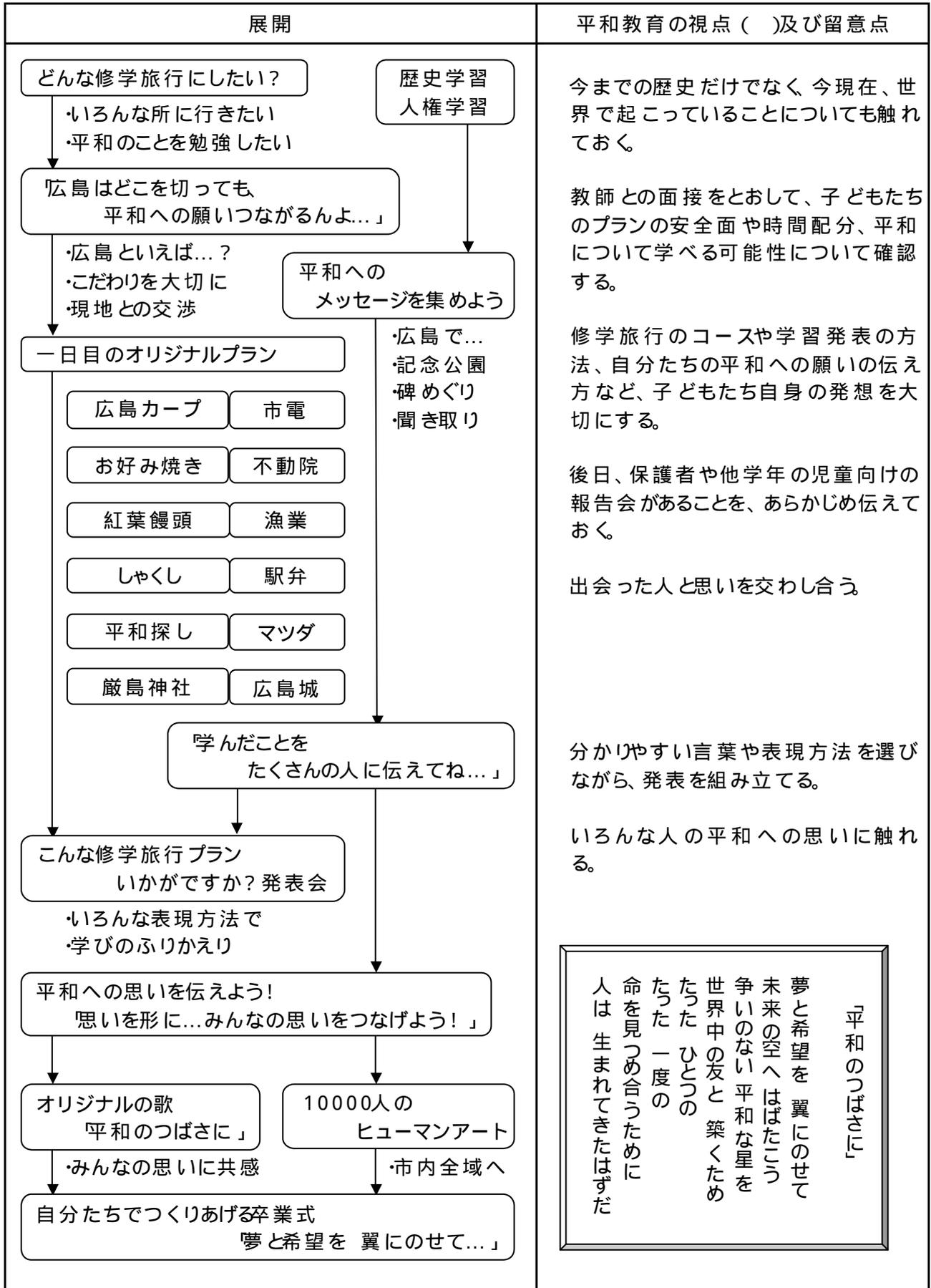
教師との面接をとおして、子どもたちのプランの安全面や時間配分、平和について学べる可能性について確認する。

後日、保護者や他学年の児童向けの報告会があることを、あらかじめ伝えておく。

修学旅行のコースや学習発表の方法、自分たちの平和への願いの伝え方など、子どもたち自身の発想を大切にする。（オリジナルの平和の歌やヒューマンアートにつながった）

できることを行動に移す、出会った人と思いを交わし合う、みんなの平和への願いをつなげることを大切に取り組む。

学習の流れ



・実践報告

1. 「広島はどこを切っても、平和への願いにつながるんよ...」

本校では毎年広島へ修学旅行に行ってきたが、新しい出会いを楽しみながら、もっと主体的に平和への思いを深めていく修学旅行にするために、1999年から全体の活動を見直した。

下見に行ったとき、語り部の山岡ミチコさんがおっしゃった「広島はどこを切っても、平和への願いにつながるんよ...」という言葉がキーワードとなった。

子どもたちが広島について知っていたことは、原爆や記念公園、広島カープや広島風お好み焼きなどであった。もっといろんな角度から平和に迫って行ってほしいという気持ちで修学旅行をとらえなおしていった。

歴史学習を積んだ上で、平和について学ぶために広島に行くという原点を子どもたちと確認した。そして、子どもたち自身が1日目のコースを考え、学んだことを先生やお家の人の前で発表することを伝えた。安全面や時間など現実に可能かどうか、平和について学べる可能性があるか、自分と活動がどうつながっているか...。子どもたちはいろんなプランを考え、一人ずつ教師との面接をした。そして、それぞれの思いを胸に、こだわりの修学旅行プランで広島に向かった。

<市電>

「原爆が落ちたてすぐなのに、どうして動かすことができたんやろう？」現地に電話をしてみると、今でも被爆した電車が町を走っているらしい。原爆で大きな被害を受けた人々が市電の走る姿を見てどれだけ元気付けられたか、どうしてもその電車に乗って感じたいということだった。

<広島城>

はじめは、被爆した城としての広島城に興味をもっていた子どもたち。しかし、調べるうちに、城内には「大本営」や「通信司令室」があったということがわかった。これは、きっと原爆投下と関係があるかもしれないという確信をもって、実際に広島城周辺を調査に行きたいと言ってきた。

<不動院>

市内から少し北にある不動院に行きたい子どもたちの気持ちが、はじめはよくわからなかった。「不動院自体は被害を受けていないけど、市内から逃げていく人たちがきっと通ったと思うねん。そんな話聞かしてくれへんかな。」思わず、山岡さんの言葉と重なった。

2. 修学旅行発表会「こんな修学旅行プラン、いかがですか？」

昼過ぎに広島駅に着いて5時に宿舎に帰ってくるまでの時間に、子どもたちはたくさんさんの経験をし、新しい出会いや発見をもって帰ってきた。

<広島風お好み焼き>

実際に自分で味を確かめた後に、はじめは「一銭焼き」がルーツだったが、戦後食べるものが少なく粉が十分に手に入らないので、キャベツをたくさん入れて何とか生きてきたということや、今はいろんな具を入れることができるからとても幸せだということなどを、お店の方が丁寧に話してくださった。

<広島東洋カープ>

廃墟の中から立ち上がっていった広島市民を少しでも元気づけるために、広島東洋カープは生まれた。その果たした役割と歴史について、グラウンドの中で話を聞かせていただいた。

<あなごめし>

名物の「あなごめし」を出発点に、戦時中の食べ物について聞けることがないか考えた駅弁チーム。社内にある資料を集めていただき、当時はみんなが兵隊さんのために我慢して、せいっぱい送り出すことが何よりも大切なことだったことを話してくださった。

<しゃくし>

宮島名物のしゃくしを作らせてもらったしゃくしチームが、一日の感想を山岡さんに聞いていただいた。「しゃくしには、人を“めしとる”という意味があって、戦時中はたくさん作られたんよ」この一言でやっとながった実感をもつことができ、次の目標が見えてきた。

< 漁業 >

原爆が落とされた後の海がどうなったのか知りたかった漁業チームは、地元の漁業組合の方に今の養殖の様子もおりませてもらって聞かせていただいた。原爆で壊滅的なダメージを受けただけでなく、その後も捕れない上に売れない状態が続いたこと、その中から必死で海の命を取り戻すために苦労や工夫を重ねてきて、やっとおいしい海の幸がたくさんある海に戻ったことなどを話していただいた。そして、胎内被爆者ということをお話していただいたときに、子どもたちは今もいろんな形で原爆の苦しさが続いていることを知った。

修学旅行の発表会「こんな修学旅行プラン、いかがですか？」では、たくさんのお家の方の前で、クイズやビデオ上映はもちろん、畳を敷いた上での茶話会や広島風お好み焼きの屋台など、自分たちが一番伝わりやすいと考えるスタイルで、学んだことをいきいきと発信していった。

「平和」という言葉がつく場所やものが多いことに興味をもった平和探しチームは、現地のボランティアの方と一緒に巡りながら発見した場所を散策マップにまとめ、発表会当日は縮小版をプレゼントした。

3. 10000人のヒューマンアート

これまで修学旅行の2日目は、朝の平和の集いで『折り鶴』を歌い、平和記念資料館見学や碑巡りをするという内容だったが、もっといろいろな人の平和への思いに触れられるようにと、新しい取り組みを模索していった。

以前、沖縄に行ったときに、平和へのメッセージカードを書いてもらうようお願いしてまわっている人たちがいた。カードには似顔絵とメッセージを書き、横につなげていくと、人間が手をつないでいるようなものになっていた。

こだわりの修学旅行プランが形になっていくにつれ、子どもたちからいつもと違う形で平和の気持ちを形にしたいという思いを出してきた。沖縄でのメッセージの話をすると、子どもたちは非常に興味を示して次々に話がまとまっていった。10000人の平和へのメッセージを一つのアートにまとめあげ、世界へアピールしていく「10000人のヒューマンアート」を作ろうということになった。

それぞれのコースや平和記念公園で出会った人たちに、自分たちの平和への思いを伝え、カードにメッセージを書いていただいた。そして、再びいろいろな人の思いに出会うこととなった。

「私も原爆にあって、今も手が不自由なの。口で言うから、あなたが代わりに書いてくれる？」

お願いした方からこんな言葉が返ってきた。

「あなたたちの笑顔そのものが平和なのよ。だから、がんばってね」

勇気を振り絞ってカードのお願いに行った子どもたちが、そんな一言で元気づけられる。そして、そんな出会いが子どもたちの平和への思いをどんどんと高めていった。

広島で集まったメッセージカードは200人を少し越えるぐらいだったので、同じ市内の小中学校のみんなにもお願いしてまわることを考えた。とてもハードルの高いことだったが、集まったメッセージカードをみんなで読み合わせ、熱い思いに後押しされて、小中学校から幼稚園や保育所、高校、商店街や駅、公共施設やスーパーなどにもその輪を広げていった。

4. 『平和のつばさに』

平和の集いで歌った歌は替え歌だったが、修学旅行後に、もう一度自分たちで歌を作りたいと言ってきた。全員の言葉をまとめてオリジナルの歌詞をつくり、作曲につ

いては、教頭先生に「ローゼンビート」という楽団の浜渦さんを紹介していただいた。子どもたちは今までの活動を話し、歌詞を手渡した。浜渦さんからは、自らの生い立ちや、障害をもつ子どもたちとのふれあいから始まった音楽教室のことなど、音楽活動をする上でのこだわりについて話していただいた。

1月31日、ローゼンビートさんによる音楽会が行われ、最後に、6年生と浜渦さんの合作『平和のつばさに』が初めて披露された。「あんなに思いのこもった詩は、今まで出会ったことがありません。ぼくもみんなの歌に元気をもらいました」という浜渦さんの言葉に、6年生は自分たちのしてきたことの大きさや人に与える影響を感じながら、自信のあるきりっとした表情をしていた。

5. みんなが残してくれたもの

卒業生を送る会の前日、10000人のヒューマンアートがついに完成した。天井から吊られた大きい折り鶴を目の前にして、どこからとなく歓声があがった。

「夢と希望を 翼にのせて...」

今年も子どもたちが歌う声が聞こえる。